

いわての農地と水路づくりの物語

農業農村整備「紙芝居」の紹介⑤ 農林水産部農村計画課

農業農村整備紙芝居は、郷土の先人達が築き上げてきた農地や農業用水の開発の歴史を、次代を担う子どもたちに伝え、ふるさとへの愛着や施設への愛護心を持ってもらおうと、岩手県農林水産部が平成12年から取り組んでいるものです。

現在は、全1話をそろえ、毎年、小学校の出前授業や「いわて環境王国展」などの各種イベントで上演し、好評をいただいています。

このコーナーでは5話（毎回1話）に分け、農業農村整備紙芝居の内容を簡単に御紹介します。最終回となる今回は、一戸町奥中山地域の大農地を造り上げた「佐市郎夫婦（さいちろうごふご）」の物語です。



⑦「さて、みんな！次は何かお金となる作物をつぐってみんなの生活を楽にするべ！」佐市郎はキャベツを植え、大人の頭より大きい、立派なキャベツの収穫に成功しました。



③明け方、佐市郎は心配そうな家族に見送られ、大塚谷地へ出発しました。道なき道を行くと、突然、目のさめるような大平原にでました。「うわあっ！ひっれえじゃあ〜!!!」



⑧さらに佐市郎は自分たちの食べる米をとるため、田んぼづくりを始めました。「こんな寒い土地じゃ米はとれねえ」村人は佐市郎に言いましたが、佐市郎は決してあきらめません！



④その晩、佐市郎は地元の村人の家に泊めてもらいました。「ここらへんの荒地で百姓するなどどうてい無理だす…」村人は言いましたが、佐市郎の決心はゆるぎません！



⑨ため池をつくり、冷たい沢水をあたためてから田んぼにひいたり、寒い土地で育つ「坊主」という品種の稲を植えるなどの工夫を重ね、苦勞の末、稲の作付けに成功するのでした。



⑤やがて21歳になった佐市郎は16歳の「オリ子」と結婚しました。「どうせ無理だべ」という村人の声をよそに、2人は苦勞の末、荒地に水を流す用水路を掘りました。



①このお話は、今から100年ほど前の一戸町奥中山地域を舞台としたお話です。18歳になった佐市郎は、ある日、こんな話を耳にしました。



⑩その後も、佐市郎は平原に道路をつくったり、小学校を開くなど、地域のために尽力し、のちに、多くの人々から、「奥中山開拓の父」とたたえられたのでした。（終）



⑥その後も2人は協力し、畑をつかって大豆を植えました。立派に育った大豆を見て、はじめは佐市郎を笑っていた村人も、いっしょになって大豆やヒエを作るようになりました。



②「大塚谷地をたがやせば、ここらへんでいづばんの百姓さなれるんだもなあ〜・・・」百姓になりたかった佐市郎は決心しました「よし！おらが立派な畑さしてみせる！」。

お問い合わせ
岩手県農林水産部農村計画課
電話：019-629-5666

・農業農村整備紙芝居は下記ホームページでも閲覧できます。
岩手県公式サイト → 農業農村紙芝居 でサイト内検索
・モバイル版は右のバーコードからアクセスできます。

